

10/3 SAT.

## 東京オペラシティシリーズ 第118回

2020年10月3日(土) 2:00p.m. 東京オペラシティコンサートホール

## Tokyo Opera City Series No.118

Sat. 3rd October 2020, 2:00p.m. Tokyo Opera City Concert Hall

大友 直人 [指揮]

嘉目 真木子 [ソプラノ]

錦織 健 [テノール]

グレブ・ニキティン[コンサートマスター]

Naoto Otomo, Conductor

Makiko Yoshime, Soprano

Ken Nishikiori, Tenor

Gleb Nikitin, Concertmaster

千住 明／松本 隆(作詞)：

詩篇交響曲「源氏物語」(2008) (50')

I. 序曲 II. 桐壺 III. 夕顔 IV. 若紫 V. 葵上  
VI. 朧月夜 VII. 須磨 VIII. 明石 IX. 幻 X. 終曲

休憩(20')

A.Senju / Text by Takashi Matsumoto :

Symphony of Psalms "The tale of Genji" (2008) (50')

I. Overture II. Kiritsubo III. Yugao IV. Wakamurasaki  
V. Aoi no ue VI. Oboro Zukiyo VII. Suma VIII. Akashi  
IX. Maboroshi X. Finale

Intermission(20')

シベリウス :交響曲 第2番 二長調 作品43 (45')

I. アレグレット  
II. テンポ・アンダンテ・マルバート  
III. ヴィヴァチッシモ  
IV. フィナーレ:アレグロ・モデラート

J.Sibelius Symphony No. 2 in D Major, op.43 (45')

I. Allegretto  
II. Tempo andante, ma rubato  
III. Vivacissimo  
IV. Finale: Allegro moderato

●主催／公益財団法人東京交響楽団

●助成／文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

※当初の予定から、出演者、曲目が変更となりました。※ニコニコ生放送による生配信がございます。

楽曲解説はP.08をご覧ください



10/3 SAT.



©Rowland Kirishima

# Naoto Otomo

Conductor

**大友直人** [指揮]

Honorary Guest Conductor  
名誉客演指揮者

桐朋学園在学中に22才でNHK交響楽団を指揮してデビュー以来、日本の音楽界をリードし続けている日本を代表する指揮者のひとりである。日本フィル正指揮者、大阪フィル専属指揮者、東京交響楽団常任指揮者、京都市交響楽団常任指揮者、群馬交響楽団音楽監督、琉球交響楽団音楽監督を歴任。2020年1月、高崎芸術劇場の芸術監督に就任。

また東京文化会館の初代音楽監督として東京音楽コンクールの基盤を築いたほか、数々の自主制作の企画を成功に導いた。海外オーケストラからも度々客演として招かれ、ハワイ響には旧ホノルル響時代から20年以上にわたり定期的に招かれている。

小澤征爾、森正、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘らに学ぶ。NHK交響楽団指揮研究員時代にはサヴァリッシュ、ヴァント、ライトナー、プロムシュテット、シュタインらに学び、タングルウッドミュージックセンターではバーンスタイン、プレヴィン、マルケヴィチらにも指導を受けた。

Otomo has led Japanese music scene since his debut. He currently serves as Music Director at the Ryukyu Symphony Orchestra (Okinawa) and Artistic Director of Takasaki City Theatre, and previously held posts at the Japan Philharmonic, Tokyo, Kyoto and Gunma Symphony Orchestras and Osaka Philharmonic.

He has appeared repeatedly with the Royal Stockholm Philharmonic, National Symphony Orchestra of Romania, Indianapolis Symphony, Hawaii Symphony, and he led the Philharmonia Orchestra on its tour to Japan.

Otomo has performed with world-renowned soloists, such as Radu Lupu and Mstislav Rostropovich, among others.

Well-known for his wide repertoire ranging from classical to contemporary, Otomo has premiered numerous new works in Japan, such as several pieces by James MacMillan and opera "A Flowering Tree" by John Adams. He was also awarded for his performance of Italian premiere of Saegusa's Jr. Butterfly at the Puccini Festival.



©T.Tairadata

# Makiko Yoshime

Soprano

嘉目真木子 [ソプラノ]

国立音楽大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所修了(優秀賞)。文化庁在外研修員として渡伊。二期会『魔笛』(故実相寺昭雄演出)パミーナで本格的なオペラデビューを飾り、以後『フィガロの結婚』スザンナ、『ドン・ジョヴァンニ』ツェルリーナ、『パリアッチ』ネッダ、『こうもり』ロザリンデ、『魔弾の射手』アガテ等主要な役で出演を重ね、2018年には二期会とフランス国立ラン歌劇場共同制作『金閣寺』(宮本亞門演出、仏初演)女役でフランスデビュー。翌年の東京公演でも同役及び有為子で出演した。19年日生劇場『コジ・ファン・トゥッテ』フィオルディリージ、グランドオペラ共同制作『カルメン』(A.バットィストー二指揮)ミカエラで出演。『第九』等コンサート・ソリストとしても活躍の他、NHKニューイヤーオペラコンサートにも出演。2017CHANEL Pygmalion Daysアーティスト、トップホールエスポワールアーティスト。20年11月二期会『メリー・ウィドー』ハンナ・グラヴァリで主演予定。二期会会員

Makiko Yoshime completed undergraduate and graduate studies at Kunitachi College of Music After completing training at the Nikikai Opera Institute, she studied in Italy under the Agency for Cultural Affairs Overseas Study Program. She made her debut as Pamina in the Tokyo Nikikai Opera Theatre's production of Die Zauberflöte. Since then, she has played important roles at the Tokyo Nikikai Opera Theatre, such as Susanna, Zerlina, Nedda, Rosalinde, and Agathe. She made debut in France as Die Mädchen in the Tokyo Nikikai/ Opéra national du Rhin co-production of Kinkakuji (directed by Amon Miyamoto, French premiere), and reprised the same role, as well as that of Uiko in the Tokyo Nikikai Opera Theatre in February 2019. Selected as CHANEL Pygmalion Days artist(2017) and Toppan Hall "Espoir" artist, both of which encourage high-potential young musicians. She is a member of Nikikai.

10/3 SAT.



©大八木宏武(都恋堂)

# Ken Nishikiori

Tenor

**錦織 健** [テノール]

国立音楽大学卒業。文化庁オペラ研修所第5期修了。文化庁在外研修員としてミラノに、また五島記念文化財団の留学生としてウィーンに留学。第17回ジロー・オペラ賞新人賞、第4回グローバル東敦子賞、第1回五島記念文化賞新人賞、第6回モービル音楽賞洋楽部門奨励賞受賞。1986年「メリー・ウィドウ」カミーユ役でデビュー以後、数多くのオペラ公演に出演、また第九や宗教曲等のソリストとしても高く評価を受け、親しみやすいトークを交えたりサイタルでも多くのファンを魅了している。2002年からはオペラ・プロデュースも始め、2015年には第6弾モーツァルト作曲「後宮からの逃走」も手がけた。その他、2000年、03年のNHK紅白歌合戦への出演や2012年より6年間NHK-FM「DJクラシック」のパーソナリティーを務めるなど、テレビやラジオ番組への出演も多い。

Ken Nishikiori graduated from Kunitachi College of Music and completed the fifth term at the Opera Studies Center. He also studied in Milan and Vienna. He is a recipient of the 17th Giraud Opera New Artist Award, the 4th Global Atsuko Azuma Award, the 1st Gotoh Memorial Cultural Award's New Artist Award, and the 6th Mobil Music Award for 'Promising New Musician' in the Western Classical Music Division. Since his debut performing Camille in The Merry Widow in 1986, Nishikiori has been highly acclaimed for his performances in operas, concerts of sacred music with orchestra, and recitals where he fascinates fans with his friendly talk as well. He also appears in TV and radio programs. Since 2002, he has been producing operas and carried out the 6th project with Mozart's "Die Entführung aus dem Serail" in February - March, 2015.

## 10/3 SAT.

千住明(1960～)

## 詩篇交響曲「源氏物語」(2008)

紫式部が記した平安時代の長編小説「源氏物語」。光輝くほど美しくすべての才能に優れた光源氏を描く54帖からなる物語は、原作だけでなくさまざまなジャンルの作品となって愛されているが、この世界を歌とオーケストラで描いたのが詩篇交響曲「源氏物語」だ。各曲は複数人物の視点・思いを綴るが、紫の上と光源氏の対話を除き、歌手1人が1曲を通して歌う。映画音楽も数多く手がける千住ならではの“音の平安絵巻”を楽しみたい。

**序曲**、オーケストラの壮大かつ繊細な響きで1000年前の世界へ誘う。**桐壺**、1帖「桐壺」より。母・桐壺の更衣は光源氏が3歳のときに逝去。その後入内した藤壺に母の面影を重ね、密かに思いを寄せていく。歌詞第6連の音楽は第3連のリピードで、藤壺が桐壺と生き写しであることを音楽でも表す。**夕顔**、4帖「夕顔」より。光源氏が立ち寄った家の隣から、歌が詠まれた扇を贈られ(第2連)、光源氏は歌を返す(第3連)。素性も分からぬまま、垣根に夕顔が咲く家の姫に惹かれていくが、姫は物の怪に襲われ亡くなる。**若紫**、5帖「若紫」より。藤壺の姪、紫の上と出会う。第2連の紫の上の言葉から彼女の幼さが分かるが、彼女を育てたいと願う光源氏は結婚を申し込む。その一方で藤壺への思いが募り、契りを結んでしまう(第5連)。**葵上**、9帖「葵」より。葵の上は光源氏の正妻だが、歌詞は主に六条御息所の思いを歌う。身分の高い六条御息所だが、光源氏に焦がれるあまり生霊となり、葵の上を殺めてしまう。**朧月夜**、前半は8帖「花宴」、後半は10帖「賢木」より。花見の宴のあと、朧月夜を愛でる歌を詠む姫と出会う。その姫は政敵・右大臣の娘。危険な恋にのめり込んだ末、嵐が去った朝、右大臣と弘徽殿の大后に見つかってしまう。**須磨**、12帖「須磨」より。光源氏26～27歳。失脚した光源氏は須磨へ隠遁する。紫の上との別れを惜しむ対話、オーケストラの間奏ののち場面は須磨に。紫の上や都を懐かしむ思いを描く。**明石**、13帖「明石」より。光源氏27～28歳。夢にあらわれた父・桐壺院のお告げで須磨を去り明石へ。そこで明石の君と結婚するが、都へ帰ることに。明石の君と琴を弾き合い、「調弦が緩む前に逢瀬を遂げましょう」と約束して別れる。**幻**、41帖「幻」より。光源氏52歳。彼が「源氏物語」に登場する最後の帖。40帖「御法」で亡くなった最愛の紫の上を思う光源氏を描く。**終曲**、序曲と対になる音楽。平安ロマンの世界の幕を静かに閉じる。

神原律子 Text by Ritsuko Sakakibara

作曲:2008年

初演:2008年10月31日京都、大友直人指揮、京都市交響楽団。

編成:ソプラノ独唱、テノール独唱、フルート2(ピッコロ持替1、アルトフルート持替1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット2、ファゴット2、コントラ・ファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、バス・チューバ1、ティンパニ、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、ウィンドチャイム、シンバル、大太鼓、タムタム、拍子木、風鈴、鈴、ハーブ、弦5部

# A.Senju : Symphony of Psalms “The tale of Genji” 2018 [歌詞]

千住 明 : 詩篇交響曲「源氏物語」(2008)

作詞 : 松本 隆 text by Takashi Matsumoto

Ⅱ.桐壺 (テノール)	Ⅲ.夕顔 (ソプラノ)	Ⅳ.若紫 (テノール)
<p>月より白い頬の色 絹糸に似た長い髪 朝の露より儂く生きて 透明なまま天に召された</p>	<p>夕顔を扇に乗せ届けましょう 手で摘まむには か弱すぎる花だから</p>	<p>山なみの青紫に 桜の点 消え残る春 前髪が扇のように 花やいだ少女に逢った</p>
<p>愛されすぎると薄幸になる 父の帝の寵愛が過ぎ 後宮たちの妬みの渦が 命の衣を剥ぎ取った</p>	<p>もしかしてあなたって あの光る君かしら 白露の眩(まばゆ)さに この花も映えるでしょう</p>	<p>雀の子 犬君が伏籠 転がして空に逃げたの 尼君は顔きながら 子の未来 案じて泣いた</p>
<p>桐壺 私は母の顔を知らない 亡くなったとき 幼子だった 桐壺 私は母の顔を知らない その空白の面影を 私は一生追うのだろう</p>	<p>そばに来て確かめて そう歌で答えたの 黄昏にぼんやりと 滲んでた遠い人</p>	<p>藤壺の紫の根が この子にもつながっている 野辺に咲く可憐な花を 手に摘んで育ててみたい</p>
<p>光る君 光る君 女御や更衣が手で招く 利発さを父は案じて 源氏の名を与えてくれた</p>	<p>名前も知らない 教えない 普段着のままここにきて 身分も訊かない 答えない ただ優しさの輪郭を こうして指でたどるだけ</p>	<p>母のない 私と同じ 境遇の藤壺の姪 引き取ると願う言葉を 尼君は冷たく拒む</p>
<p>藤壺の君が入内したとき 母にそっくり 皆が騒いだ 床几を抜けて御簾の内まで 膝に甘えに遊びにいった</p>	<p>布を打つ砧の音 庭先の秋の虫 ありふれた日常が 音楽に変わるのね</p>	<p>苛立ちに背中を押され 藤壺の御簾をすり抜け なんて罪深い なんて罪深い 父を裏切り 夫に背を向け 人に言えぬ生命宿した</p>
<p>藤壺 私の母と生き写しのひと 元服すると逢えなくなった 藤壺 母とあなたが二重写しに 御簾の外から動く影 目で追いながら焦がれてた</p>	<p>幸せはいつだって 永續きしないもの 空渡る月の船 瞬き消え入りそう</p>	<p>深い秋 尼は亡くなり 遺された孤独な少女 雷鳴に怯える背中 守ろうと心に決めた</p>
<p>桐壺 私は母の顔を知らない 亡くなったとき 幼子だった 桐壺 私は母の顔を知らない その空白の面影を 私は一生追うのだろう</p>	<p>名前も告げない 尋ねない 夕顔に似た女だと 記憶のかけらを残せばいい やがて静かな夜の底 私はそっと目を閉じる</p>	<p>さあ髪を梳かしてあげよう さあ髪を梳かしてあげよう かかとまである黒髪が 千尋の深さの 海の底へ届くまで あなたの未来を見届けよう あなたの未来を見届けよう</p>

## 10/3 SAT.

## A.Senju : Symphony of Psalms “The tale of Genji” 2018 [歌詞]

千住 明 : 詩篇交響曲「源氏物語」(2008)

## V. 葵上

(ソプラノ)

魂が身体を離れ  
空を舞い雲間を滑る  
逆立った髪は墨色  
星空を塗りつぶしていく

光る君 一目見ようと  
祭りの日 混みあう車  
正妻の葵の君に  
割り込まれた壊れた車

東宮妃だった私に  
なんという哀しい恥辱  
めらめらと心の奥に  
嫉妬の火 飛び火していく

臨月の葵が伏せる  
部屋の隅 宙に浮かんで  
憎しみの化身となって  
まなざしも般若に変わる

泣かないで きっとよくなる  
囁かれ微笑む葵  
ご祈祷をゆるめてください  
苦しくて息ができない

恋しさにさまよう心  
その指でつなぎとめてね  
途中から声が変わって  
誰だ！って突き放された

夕霧という男の子  
産んだ後 葵は死んだ  
冷酷で高飛車だった  
妻なのに源氏は泣いた

悪い夢みていたように  
汗ばんで目覚めた私  
護摩に焚く芥子の香りが  
服や髪しみこんでいた

## VI. 朧月夜

(テノール)

花の宴 酔いにまかせて  
弘徽殿を散歩していると  
きれぎれに「朧月夜…」と  
歌う声 華やかな影

名は明かさず 互いの扇  
取り換えて約束にした  
政敵の六の君だと  
あとで知りなお惹かれてく

月の光を隠す雲  
輪郭がみな溶けていく  
私の生きる道さえも  
妖しい影に包まれる

藤壺は顔を背けて  
拒みきり出家なされた  
東宮を守り抜くため  
ご自分の愛を投げ捨て

その逆に朧月夜は  
危なげな恋を貫く  
帝へと参内ののちも  
情熱は燃え立つばかり

彼女の父の右大臣  
密会の部屋に急に来て  
袖に絡んだ私の帯と  
恋歌書いた紙の海を見た

月の光を隠す雲  
弘徽殿の女御はそれを聞き  
帝に謀反企てたと  
私に罪をなすりつけた

## VII. 須磨

(ソプラノ/テノール)

紫の上「連れてってくださらないの  
寂しげなその海岸へ」

源氏「長いことかかるようなら  
岩屋でもあなたを呼ぼう」

紫の上「でも謹慎の旅だから  
私がいると邪魔なのね」

源氏「頬はこけ やつれてしまった  
身体こそ遠く離れても  
鏡に映る自分のように  
二人は一心同体のはず」

紫の上「手鏡に残像残していつて  
覗けばいつでも逢えるように」

須磨の浜 ひとり眠れず  
四方(しほう)から吹く風を聴く  
打ち寄せる幻の波  
泣き濡れた枕が浮かぶ

琴の弦 爪弾く音色  
哀しくて途中で止めた  
都から吹く風のせい  
従者まで起きてみな泣く

須磨浜の海鳴りを  
絵筆をとって描くたび  
透明な青さだけ  
手から心に染み込んでいく

## VIII. 明石

(ソプラノ)

嫁ぐなら高貴な人へ  
父、入道に言われ育った  
その夢がかなわぬときは  
海にでも身を投げるがいいと

高麗の紙 くるみ色の文  
綺麗な文字に気後れがして  
行間に心の深さ  
量りきれずに拒み通した

十三夜の月  
月毛の駒で雲間を駆けて  
思う誰かは別にいるのに  
海に淡路島  
私の琴が聴きたいと言う  
風の細紐 弦を鳴らした

年代わり帝は目を病み  
物の怪に悩む大后  
光る君 無実の罪を  
許されて帰京が決まる

凧塩焼く煙のように  
離れても風に溶け合う  
形見にとくさる琴の  
調弦が緩まる前に…

澄み渡る音色  
あなたの方へ寝返る波に  
この身を投げて沈みましょうか  
旅の狩衣  
涙を濡れた互いの服を  
取り換えましょう また逢う日まで

## IX. 幻

(ソプラノ/テノール)

紅梅がつぼみをつけて春の陽が庭に降っても  
あなたの姿に切り抜かれた心に白く雪が舞う

雪の朝 女三の宮の部屋を出て急に訪ねた  
凍てつく両手を暖めながら涙で重い袖を隠した

永遠に続いたはずの幸福がひび割れてゆく  
柏木に不義の子を作られ運命の手に頬叩かれた

紫の上「生きているのも束の間ね草の葉の露のよ  
う乱れた風にさらわれるだけ」

源氏「先争って消えていく儂げな命なら  
あまりあなたを待たせないはず」

つやめいて波をうつ髪その頬は命あるよう  
栄華を極めた私のはずがたった一人の最愛の人も  
幸福にできなかった

紫の上「犬君が雀逃がしたの  
天をめざして羽撃(はばた)いた」

源氏「桜咲く山道を  
走り去って少女の背中」

源氏「晴れた日に二人交わした  
文の束燃やしましょう」

紫の上「鏡に影を残していつ  
覗けばいつも逢えるように」

春までの命だろうか  
雪に咲く 紅梅の花  
髪に飾って歩いていこう  
光あふれる幻に向かって



# 10/3 SAT.

ジャン・シベリウス (1865~1957)

## 交響曲 第2番 二長調 作品43

森と湖の国フィンランドは1917年に独立した国であり、それ以前は長きにわたリスウェーデンに支配され、19世紀、ジャン・シベリウスが生まれた頃はロシアの治世下だった。19世紀末になりフィンランドの自治が弾圧され始めると反ロシアの機運が高まり、1900年夏のパリ万国博覧会では国際社会に向けてフィンランドをアピールするため、シベリウスの交響詩「フィンランディア」が披露された（ただしロシア当局の検閲を避けるため「祖国」という題に変更しての演奏だった）。

フィンランドの第2の国歌と言われる交響詩「フィンランディア」だが、このような題の作品を万博で演奏しようと考えたのはシベリウス自身ではなく、「X」と名乗る人物から届いた手紙によるものだった。その人は、この手紙以降シベリウスのパトロンとなるアクセル・カルペラン男爵だ。彼がこの手紙でさらに提案したのがイタリア旅行だった。いつの時代もイタリアは芸術家にインスピレーションをもたらしてくれる国。チャイコフスキーやR.シュトラウスを例に挙げ、イタリア旅行は作曲家を成長させるものであり、シベリウスもぜひ経験すべきだとカルペラン男爵は考えたのだ。実はシベリウスはパリ万博の前、1900年初めに最愛の三女をチフスのため1歳3か月で亡くしており、パリから帰国後も悲しみの中にいた。その気持ちを振り切るためにも再び外国に行こうと思ったのかもしれない、男爵の申し出を受けて1900年10月末にイタリアへ向けて出発。ベルリンを経由して1901年1月にジェノヴァの東の港町ラッポロに到着し、その後ローマやフィレンツェなどにも滞在しながら新しい曲がスケッチを進めた。その中にはドン・ファン伝説やダンテ『神曲』に基づく曲があったが、作品としては実現せず、代わりにそのスケッチを使って別の曲を作曲した。それが交響曲第2番だ。カルペラン男爵に捧げる交響曲として帰国後も作曲を続け、1901年10月にはカルペラン男爵に5楽章の交響曲になると伝えたが、最終的には全4楽章として完成。1902年にシベリウス自身の指揮によって初演され、大成功を収めた。

シベリウスは調性に色を感じる共感覚の持ち主で、二長調には黄色のイメージを抱いていた。交響曲第2番が二長調なのは、太陽が燦爛と照るイタリアの空の下で書かれたからだろう。また、フィンランド帰国後、シベリウスは作曲を続けるにあたり湖のほとりの仕事場を求めており、黄色い太陽だけでなく、水にもインスピレーションを得て作曲された交響曲である。その音楽は、暗く沈むような第2楽章を経て、第4楽章の輝かしいフィナーレに到達するため、初演時フィンランドの評論家たちは、ロシアの支配に

抵抗して自由を勝ち取るフィンランド国民を描いた交響曲だと論評したが、シベリウス自身は否定している。のちにシベリウスは「交響曲第2番は魂の告白だ」と語った本作、イタリアやフィンランドの空気、そして明暗のコントラストのドラマを味わいたい。

**第1楽章** ソナタ形式の楽章。寄せる波のような弦楽器の動機、のどかな木管楽器の動機、ヴァイオリンによる輝かしい歌などさまざまな動機があらわれ、シベリウスの言う「深遠な論理」でそれらがつながり展開していく。

**第2楽章** イタリアでスケッチしたドン・ファンに関連する旋律を主題に使った楽章。そのスケッチの横には、ドン・ファンと石像の宴の場面——無言だった石像が歌い始め、彼が“死”であることをドン・ファンは悟る、という内容の詩が書かれているため、第2楽章は「死」がテーマといえるかもしれない。低弦のピツィカートと共にファゴットが寂しげな旋律を歌い、情熱的な音楽が進んだのち、一転して嬰へ長調の天国的な音楽に（やはりイタリアでスケッチした『ダンテ』の音楽を転用。そのスケッチにシベリウスは「キリスト」と記していた）。しかし天国の世界は長く続かず、緊張を高めていく。

**第3楽章** スケルツォの楽章。弦楽器が駆け巡り、音楽は疾走する。それと対照的にトリオでは牧歌的な音楽を美しく歌い上げる。最後は高揚し、切れ目なく第4楽章へ。

**第4楽章** 弦楽器の輝かしい主題やトランペットのファンファーレによって神々しい音楽が展開するフィナーレ。しかし、ひそやかな音階が始まり、民謡を思わせる悲しげな主題が木管楽器によって奏でられる（シベリウスの妻アイノによれば、この主題は、自殺したアイノの姉を思い書かれた曲をもとにしたもの）。光と影を思わせる音楽は、長調でクライマックスを迎え、高らかに締めくくる。

榊原律子 TEXT by Ritsuko Sakakibara

作曲：1901年

初演：1902年3月ヘルシンキ、作曲者自身の指揮。

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、バス・チューバ1、ティンパニ、弦5部